

学校の中で効果的に機能する教育相談の在り方に関する研究

- 教育相談担当の役割に焦点を当てて -

唐津市立大良中学校 教諭 大野 誠

要 旨

本研究は、教育相談が効果的に機能するために、教育相談担当がどのような役割を果たせばよいかを探ったものである。具体的には、まず、現籍校の職員を対象とした教育相談に関する意識調査を実施し、現状での課題を分析した。次に、課題を解決するためには教育相談担当が人と人をつなぐコーディネーター役を務めれば良いと考え、問題を抱えた子どもに対して学校内外の者が連携し援助することについての理論研究を行った。また、人間関係を大切にすることをコーディネーターの力量を高めるため、事例研究や面接演習等の研修を行った。その結果、コーディネーターとしての教育相談担当には人の心を理解し、丁寧に人とかかわることができる力量を求められていることが分かった。

<キーワード> 教育相談担当 援助チーム コーディネーター 人間関係づくり

1 主題設定の理由

不登校、学級崩壊、問題行動といった学校現場が抱える問題の多くは、子どもの心の問題が大きくかかわっていると考えられる。ところが、最近の子どもの心の問題は、環境や時代の変化もあり、より複雑化しており、従来までの教師の常識では理解・指導できない場合が多々あるように感じる。子どもの心の成長を促すためには、今以上に、教育相談の考え方や手法を生かした援助活動が必要であると考え。

そこで、問題を抱えた子どもをどのように援助すればいいのか、そのためには、教育相談担当がどのような役割を果たせばいいのかを明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

教育相談が効果的に機能するために必要な教育相談担当のコーディネーターとしての役割について探る。

3 研究の内容と方法

- (1) 現籍校での教育相談に関する意識調査を分析し、現状での教育相談の課題を明らかにする。
- (2) チームによる心理的援助とそのために必要なコーディネーターの役割に関する理論研究を行う。
- (3) 文献研究、講座受講、面接演習等の研修を行い、教育相談の力量を高める。

4 研究の実際

(1) 教育相談の現状と課題

ア 現籍校での教育相談に関する意識調査(質問紙法、自由記述)の結果と考察

(ア) 教師(担任)が行う面接

日頃からの信頼関係が大切であることと1対1での面接の場面は普段とは違う感じになるということは共通の認識のようだ。ただ、1対1の面接に対して、良い機会で

表1 教師が面接をすることについての職員の意見

・評価を下す者としての教師の限界がある ・一般的な話で終わる
・信頼関係があれば面接はいらぬ ・面接以前の信頼関係が大切
・普段の方が言葉やしぐさから子どもの本質を見抜ける ・普段と違う自分になった ・1対1で話をすることは多くもった方がよい
・本音で話す良い機会 ・教育相談の勉強をしたら面接で子どもがいる話してくれるようになった

あるととらえる意見とあまり意味はないととらえる意見との相違があった。

教師は評価を下す立場であるのでカウンセラーのようにカウンセリングを行うことは不可能だという前提があり、学校現場で教師が面接を行っても効果はそれほど期待できないという考えが多かった。しかし、カウンセリングの考え方や手法を学び1対1のかかわりに生かすことは、十分意義があるという考えが多いことも分かった。

(イ) スクール・カウンセラーなど心の専門家への依頼

専門家の必要性を感じている職員が多かった。専門家に求めるものとしては、子どもへのかかわり方の助言や親へのかかわり方の助言といった具体的な対処策を求めている。また、教師自身が安心感を得たいという情緒的な面での援助を求める声もあった。

表2 専門家に依頼することについての職員の意見

<ul style="list-style-type: none"> ・子どもにどう対処すればいいかわからず対処の仕方について専門家の助言が欲しいことがあった ・子どもとのかかわりがこれでいいのかという不安があって専門家に相談して安心感を得たいと思うことがあった ・子どもだけでは変わらない。親の心を落ち着かせられる専門家のアドバイスが欲しい ・母親が変わらなければ解決しないような問題では女性の専門家が良いと思った ・専門家の必要性を感じたことはない ・付き合いがない専門家に話すには限度があった ・専門家に相談に行ったことがあるが望んでいるような有効な助言をもらえなかった

一方で、スクール・カウンセラー(アドバイザー)の専門性に疑問をもっている意見もあった。また、専門家の性別や年齢に配慮しなければならないことを指摘する意見もあった。

表3 事例研究会についての職員の意見

(ウ) 事例研究会(気になる子)

事例研究会については、情報を交換し合うことで職員の共通理解が得られ、個人の見方に幅が出るといった意義を認める意見が多かった。また、職員個人の悩みを和らげるとともに職員同士の仲間意識を高める効果もあるという意見もあった。

良かった点	<ul style="list-style-type: none"> ・過去の担任からの情報で子どもをより理解することができた ・普段あまりかかわりのない子について知ることができた ・職員全体で共通理解することができた ・いろいろな意見を聞くことで幅広い見方ができるようになった ・一人の子どもの問題をみんなで分かち合うことができた ・一人で悩んでいたのが事例研に出すことで気分的に楽になった
問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・事例研を行っても、結局担任が何とかしなければならぬ ・事例研を行っても子どもの状況や子どもたち同士の人間関係の改善は現実的に難しい ・具体的な解決策が見出せないこともある ・事例研が継続性に欠け深まらない ・失敗や悩みを温かく受け止めてもらえないときがそうでないときはつらかった
改善したい点	<ul style="list-style-type: none"> ・事例研を計画的・継続的に行うべきである ・誰がどの場面でどうするかという具体的な解決策を出せたら良い ・専門家に参加してもらおうと良い ・親の立場で考えてみると保護者と共に問題の解決に向けて話合えたらよいと思う。そのためには保護者との信頼関係が欠かせない ・意見が出しやすい雰囲気づくりが必要である

しかし、子どもの心の状態、子どもを取り巻く状況、子ども同士の人間関係といった問題は、現実的に解決することが困難であり、事例研究会での話合いの限界を感じている意見も多かった。また、職員の失敗や悩みを温かく受け止められないような話合いになってしまうことの危険性を指摘する意見もあった。

やはり、事例研究会を計画的・定期的に行い、誰がどの場面でどうするかといった具体的な解決策を打ち出せるような話合い、さらに、スクール・カウンセラー等心の専門家や保護者の意見も取り入れ、より有効な解決策が見いだせる話合いが求められている。また、失敗や悩みを温かく受け止めてくれるような発言しやすい話合いの雰囲気づくりを求める意見も多かった。

(I) カウンセリングに関する職員研修

職員が望んでいる研修内容を表4に示す。多様な子どもたちがいる中で、子どもたちへの対応が難しくなってきたという実感がある。そこで、カウンセリングの技法を参考にし、子どもたちとのかかわりに生かしたいという願いをもっている職員が多かった。

表4 職員が望んでいる研修内容

<ul style="list-style-type: none"> ・カウンセリングの方法、具体的な技法 ・多様な子どもたちへの対応方法 ・話を聴く訓練 ・ロールプレイ ・心理学的見地での子ども理解の仕方
--

(オ) チームによる援助

職員間で意見を出し合いながら対応していくことは有効であり、一人で抱え込まず職員同士で支え合いながら子どもにかかわりたいと

表5 チームによる援助についての職員の意見

<ul style="list-style-type: none"> ・子どもはできるだけたくさんの人にかかわられたほうが良い ・いろいろな意見を聞くことができる ・全職員で全生徒にかかわるという視点が大切だ ・担任一人で抱え込んでしまうのは良くない ・同僚に話をするだけでも安心できる面がある ・職員同士で支え合うことが大切だ ・実際の現場ではお互いの立場を考えあまあまでまとめることが多い

考えている職員が多かった。

(カ) 教育相談に望むこと

現状での教育相談には満足していない職員が多い。教育相談には期待していないという職員もいる。まずは、普段の学校生活でのかかわりの中でどう問題を解決していくかという、現実的で具体的な対処策が求められている。

表 6 職員が教育相談に望んでいること

・改まったかたちでの相談よりも普段の生活の中で問題を解決できる方法を示して欲しい
・子どもが心を開いてくれるような一人一人を深く受け入れてくれるような相談室を望む(今の学校では無理だろう。学校を離れたほうがいいかもしれない)
・まずはなんでも言い合える人間関係づくり
・第三者の専門家が入るべきである。専門家が足りていない
・子どもだけではなく保護者や教師への教育相談を望む
・すべての学校職員が子どもを温かい目で見ていけるように

相談室については、今の状況ではあまり活用できないし、もっと工夫が必要であるとの指摘だろう。

スクール・カウンセラーなど心の専門家については、学校外の専門家を求めてはいるが専門家の数が足りず、もっと幅広い年齢層や女性の専門家を求める意見もあった。

また、温かい雰囲気づくりや、保護者や教師自身への情緒的サポートを求める意見も多く、人間関係づくりの重要性が増してきている。

イ 現状での課題

現籍校での意識調査から、現状での教育相談の課題として次の6点が挙げられる。

- (ア) 普段の子どもとのかかわりの中で生かせるカウンセリングの考え方や技法に関する職員研修の実施
- (イ) 具体的な解決策を見いだせる事例研究会の在り方の見直し
- (ウ) 職員同士で支え合い、多面的な援助が行えるチーム作りの工夫
- (エ) 援助チームを作る際の人間関係づくりや支持的な雰囲気づくりをするための教育相談担当の役割の明確化と力量の向上
- (オ) スクール・カウンセラー等心の専門家を有効に活用するための工夫
- (カ) 教育相談室の環境整備と運営の見直し

以上の課題を踏まえ、援助チームをどのように作り、どのような話し合いをもてばいいか、コーディネーターがどのような役割を果たせば職場や援助チームでの人間関係づくりや雰囲気づくりができるか、専門家とうまく連携するためにはどうすればよいか、の3点について考察した。

(2) チームによる援助

ア チームによる援助の利点

問題を抱えた子どもに対して援助者がチームを組むことには次のような利点が考えられる。

- (ア) 一人の者が問題を抱え込まずに済み、負担や悩みを軽減させることができる。
- (イ) 多方面の専門家により援助チームを構成することで、子どもを総合的に理解することができ、より有効な解決策を見いだせる可能性が増す。
- (ウ) 援助チームの構成員の力量が高まり、その援助力は他の子どもへの援助にも生かされ、予防的な効果が期待できる。

イ チームの種類

(ア) コア援助チーム

基本的に、子どもの最大の援助者は、家庭においては保護者であり、学校においては担任教師である。したがって、保護者、担任教師、コーディネーターの三者が援助チームの核となる(図1)。

(イ) 拡大援助チーム

コア援助チームでは問題解決が困難であり、他の援助資源が必要だと判断される場合には、学校内の援助資源に参加を依頼する(図2)。その際、どの

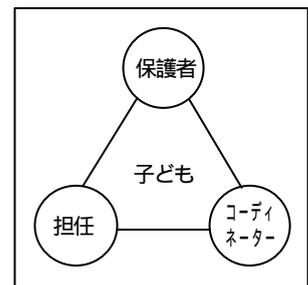


図1 コア援助チーム

ような援助資源があるかを確認するための石隈・田村式援助資源チェックシートというものがある。石隈利紀著「学校心理学」で紹介されている。また、チームが迅速に柔軟に動くためには、あまり多人数にならないほうが良い。

(ウ) ネットワーク型援助チーム

学校外の専門家の力が必要な場合は、援助チームの構成員がもっているネットワークを利用して広く援助を依頼する。

ウ 石隈・田村式援助チームシート

援助チームの話合いでは、石隈・田村式援助チームシートを活用すると有効である。これは、石隈利紀著「学校心理学」で紹介されている。このシートに沿って話合いを進めると次のような流れになる。

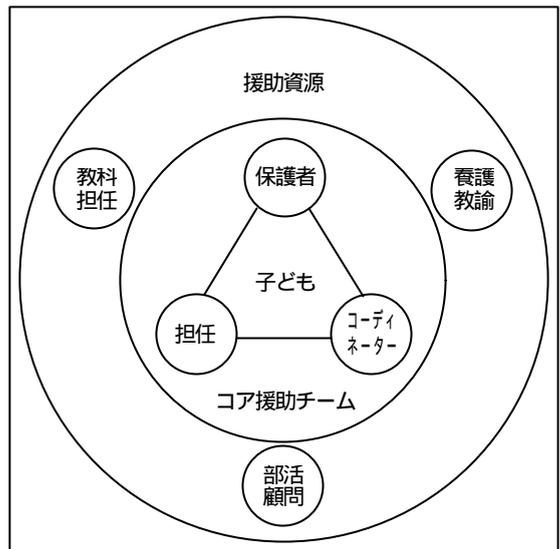


図2 拡大援助チームの例

4 領域(学習面、心理・社会面、進路面、健康面)での子どもの良いところや援助が必要なところなどの情報の収集 実現できそうな具体的な解決案の作成 援助チームの構成員の役割分担

問題が発生した原因ではなく、今後の解決策に焦点を当てて話合いを進めることが大切である。また、このシートを事例研究会に用いることも効果的である。

(3) コーディネーター

ア コーディネーターの役割

援助チームを構成し問題解決に当たるためには、異なる役割の者をつなぎその関係を維持したり、それぞれの立場や思いを調整する役割を果たすコーディネーターが必要である。コーディネーターには次の役割がある。

(ア) チームによる援助が必要かどうかを見極め、援助チームを構成する。

(イ) 援助チームの構成員同士の信頼関係を築くため、それぞれの気持ちを配慮しながら一人一人に丁寧な心配りでかわわり、援助チームのよい雰囲気づくりに努める。

(ウ) 援助チームの話合いでは司会者を務め、具体的な解決策を見いだせるようチームをリードする。

コーディネーターの役割は重要である。コーディネーター役を務める者は、人間的な温かみや受容的な態度が成熟しているなどの人間性も問われる。したがって、カウンセリング・マインドを具えた教育相談担当がコーディネーター役を務めることがよいと考える。

イ 人間関係づくり

チームによる援助が成功するためには構成員同士の人間関係づくりが大切である。お互いの役割や立場を尊重しながら連携を進めていかなければならない。以下、文献、講座、演習等、長期研修で学んだことを基に、人間関係づくりの視点でまとめた。

(ア) アクティブ・リスニング

話し手に安心感・信頼感・満足感等をもたせるような聴き方を「アクティブ・リスニング」という。具体的には、次の3つのポイントに注意して相手の話を聴く方法である。

穏やかな目で相手を見る うなずく、共感的な相槌を打つ キーワードを繰り返す

逆に、目を合わせなかったり、全くうなずかないといった聞き方を「ネガティブ・リスニング」という。私は実際の演習でネガティブ・リスニングを経験したが、話し手としてはとても不快感・不安感をもつものだというを身にしみて実感した。普段の人間関係の中で、このような聴き方ということに気を配る

だけでも人間関係づくりに役立つはずである。こうした聴き方の演習は短時間ででき、しかも、実感しやすいので、職員研修で実施すると有効である。

(1) 相手を理解するという事

土居健郎は「方法としての面接」の中で、次のように述べている。⁽¹⁾

人は、普段分かったつもりでいる。「分かる」といえば馴染み・経験があるということであり、「分からない」といえば馴染み・経験がないということである。面接によって相手を理解するには、すぐに分かったつもりになるのではなく、何が分かり、何が分からないかの区別が分からなければならない。この区別がついたとき新しい視野が開かれ、理解が一段と深まる。
(筆者による要約)

このように、「分かる」「分からない」の区別がつくためには、まず、自分のことをよく分かっていなければならない。自分はどのような価値観をもっているのか、どのような思い込みをもっているのか、どのようなときにどんな感情が湧き上がってくるのかなどを自分自身で認識しておく必要がある。そして、自分と相手との相違点を意識することができて初めて相手のことが理解できるようになる(図3)。

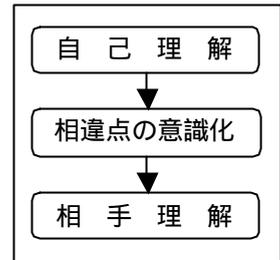


図3 相手理解の流れ

(ウ) 自分の感情に焦点を当てる

人とかがかわっていると、必ずと言ってよいほど、自分自身にいろいろな感情が湧き起こってくる。それは、心地よい感情もあれば不快な感情もある。こうした感情は相手との関係の中で生まれてくるものであり、話の内容や相手の表情など態度にも影響され湧き起こってくるものである。相手の感情が反映された自分の感情ということになる。したがって、この自分の感情に気付き、認識することができれば、感情に巻き込まれないというだけでなく、自分の感情を目印にして相手のことを理解することができる。

(I) 事例から学んだこと

上記ア、イ、ウのことを学びながら実際の面接に臨んだ。面接室あるいはプレイルームは、日常の場面とは全く異なる空間であった。そこは、クライアントとカウンセラーという二人だけが存在する密室であり、瞬間瞬間でお互いの感情が揺れ動き、お互いが影響し合う空間だと実感した。日常と切り離されたそこだけの空間ということで、それぞれの感情が純粋に表れてくるのだろう。

しかし、いろいろな感情が動くことを実感すると同時に、その感情に気付くことの難しさを感じた。これは相手の感情に気付くことよりも、まず、自分自身の感情に気付くことの難しさであった。面接の記録を人の力を借りながら丁寧に振り返ってみて初めて、自分の感情が如何に面接の流れを左右しており、しかも、面接中は自分自身ほとんど気付いていなかったかということを知らされた。

日常の人間関係はカウンセリング場面とは異なり、もっといろいろな要素が絡んでくるであろう。しかし、その根底にそれぞれ個人の感情が影響し合っていることは間違いない。人間関係づくりにおいては、それぞれ個人の感情を無視することなく、むしろ大切に扱うことが大事であると考えられる。

(4) 専門家との連携

ア スクール・カウンセラー等との連携

スクール・カウンセラー等心の専門家に、援助チームへの参加を依頼する場合は多いと考えられる。そのために、学校としてどのような工夫をしていけばよいかを考察した。

(ア) 学校職員の人間関係の輪の中に迎え入れる

スクール・カウンセラーは学校職員ではないが、学校に勤務し、学校が抱える問題の解決を目指して学校職員と共に仕事をすることになるので、仲間として迎え入れる姿勢が大切である。異なる専門家同士として、お互いの立場や役割を尊重しながら、一緒に働く同僚なのだという意識ができれば良い関係が築けると考える。

このように考えると、職員室にスクール・カウンセラーの机を用意し、相談室にいる必要がないときに

は職員室にいてもいい、仕事の話や雑談をするというのは当然のことである。また、職員会議等にもできるだけ参加してもらい、職員に配る配布物にも目を通してもらうことも必要になってくるだろう。さらには、職員レクリエーションや懇親会などにも参加してもらうことができれば、自然に相互の良好な関係性ができ、連携がうまくいくと考える。

(1) 教育相談担当者との関係を密にする

学校現場の専門性と心理学的な専門性とを結ぶことができるのは、教育相談に携わる教師だと考える。したがって、教育相談担当とスクール・カウンセラーが綿密に打合せを行い、お互いを理解し合うことは不可決である。教育相談担当が学校とスクール・カウンセラーとのパイプ役を果たすことで、両者の連携は軌道に乗ると考える。

(ウ) スクール・カウンセラーの活躍の場を広げる

子どもや保護者との面接の他に、教師の相談、事例研究会や援助チームへの参加、学校職員やPTAの研修会での講師等、スクール・カウンセラーが活躍できる場はたくさんあると考えられる。

イ 専門機関との連携

学校現場が抱えている子どもたちに関する問題には、学校だけでは解決できないものもある。学校としてできることと、できないことをはっきりさせておき、必要な場合は迅速に他の専門機関に依頼することが大切である。

学校外の専門機関と連携していくためには、各専門機関についての特性や利用法といった情報を日頃から収集しておき理解を深めておく必要がある。教育相談担当は、教育センター等の教育相談所、児童相談所、心療内科や精神科等の医療関係とのつながりを常にとっておくことが大切である。日頃から情報収集に努め、施設見学に行ったり専門機関主催の研修会に参加することも必要であろう。

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

ア 現籍校での教育相談に関する意識調査を実施した結果、現状での教育相談の課題が明らかになった。そして、課題解決のための手立ての一つとして、学校内外の者が連携して援助チームを作り、多面的な援助を行うことが大切であることが分かった。

イ 援助チームを作るなど学校内外の者(学校職員、保護者、スクール・カウンセラー、専門機関等)同士が連携するためには人間関係づくりが大切であり、コーディネーターとしての教育相談担当には人間関係づくりをコーディネートできる力量が求められていることが分かった。

(2) 今後の課題

ア 本研究の成果を基に、学校で援助チーム作りやチームでの援助活動を実践し、その有効性を検証すること。

イ 職員や専門家を含めたチームの人間関係づくりをするために、更にカウンセリングやコーディネイトの力量を高めること。

《引用文献》

- (1) 土居 健郎 『新訂 方法としての面接 臨床家のために』 1992年 医学書院 p27

《参考文献》

- ・ 文部省 『生徒指導資料第21集 生徒指導研究資料第15集 学校における教育相談の考え方・進め方 中学校・高等学校編』 平成2年 大蔵省印刷局
- ・ 石隈 利紀 『学校心理学』 1999年 誠信書房
- ・ 全国学校教育相談研究会・学校教育相談研究所編 『月刊 学校教育相談 2002年1月増刊』 2002年 ほんの森出版